

緩山河

第22号

平成21年5月15日

発行

社団法人沼津牧水会

目次

歌集『黒松』の短歌	2
第10回日本ほろよい学会 延岡大会に参加して	7
第55回沼津牧水祭 短歌大会	11
碑前祭・芝酒盛	12
碑前祭に寄せて	13
「納棺のをりに」	15
第21回雛の歌会	16
文化講座	17
サロン音楽の夕べ	18
平成20年度事業報告	19
定款・編集後記	20

歌集『黒松』の短歌

玉城 徹

一

『黒松』は牧水最後の歌集で、昭和十三年、牧水没後、十年目に、改造社から出版された。すでに、牧水生前に、牧水によって企画編集されたもので、『黒松』という書名までも決めてあったのだということが喜志子夫人の巻末記によって分かる。

わたしは、この歌集によって、牧水の最晩年の歌風についても、何か記しておきたいという心もちがおこって来た。もう一度、この歌集によって、牧水短歌の特質を考えなおしてみるのが、面白そうに思える。

茂りあふ松の葉かげにこもりたる日ざしは
冬のむらさきにして

以下引用歌は、特にことわらない限り、『黒松』の中の歌である。

最近、訪れて来る人があつて、しばらく牧水について雑談をした。その時、わたしは、こう言つた。



歌集『黒松』（短歌新聞社文庫）

「牧水というと、「白鳥は」とか「幾山河」とか、人口に膾炙した歌ばかり知つて、それで分つたように言う人が多くて困る。

「それでは、どんな歌が善いか」という質問に答えて、この一首を示した。あらかじめ書き抜いてあつたのではない。わたしの前においた『牧水全歌集』を開いて、ばらばらと頁を繰ると、昔、印をつけておいた、この歌が出て来たのである。「こういう歌は好きです」と言つて、わたしは、これを示した。

この歌は、無造作に見えるが、なかなか、そう簡単ではない。見たままというようなもので

はない。「茂りあふ松の葉かげに」は、平淡のように見えるが、一種のうま味がある。この上二句が、とどこおらず、すつきり行くために、日ごろの修練が必要であろう。

ここで、切つて読む。二句切れである。三四句を、「こもりたる日ざしは」と続けなければ意味をなさない。三句切れに読んで、「こもりたる」まで上の句にすることは出来ない。

「冬のむらさきにして」が善い。印象派風のむらさきが、ここに見えてくるだろう。わたしは、あの若き日の名歌より、この方が、ずっと好きである。沼津の千本松原に来て、こうした実景を、わたしは、たびたび見たことがある。その親しみも、あるであろう。

それより、少し前に、こんな歌もある。

若竹に百舌鳥とまり居りめづらしき夏の
すがたをけふ見つるかも

これは、白秋が長い歌壇作品評を書いて、その中で賞讃したのが、わたしの記憶にある。白秋が、歌壇の批評をしたのは、これが、ただの一度だつたと思う。

これは、一見「虚した」つまり気が抜けたように見える歌である。それを見出して誉めた白秋の眼力は、やはり大したものである。「若竹に百舌鳥」がとまつて、しばらく居つた。

それだけ言つて、描写などしないのが、善い。百舌鳥は、それほど大きくもない鳥で、ほっそりと剩憚な姿である。

秋から冬の鳥で、殊に秋が来ると鋭い声で、きりきりと高く啼く、冬の間は笹鳴きをする。実は、春にも夏にも姿を見せるのだが、誰も注意を払わないのである。梢にとまつて、はね上がった尾羽を神経質に動かすので、それと知られる。

牧水は、そういう夏の姿を、一気に、ほとんど一筆で、ここに出現せしめた。そして、今日見つるかも」と、詠嘆で言い収めた。詠嘆は、感動だろうと人は思いたがるが、それは違う。感動から芸術が生れると思うのは、俗論である。

二

牧水は、自然を歌つたばかりではなかつた。をりをり、人間の姿を歌うこともあつた。「松原湖畔雑詠」という一連がある。「信濃南佐久郡なる松原湖畔の宿屋に同国の友人数名と落合ひ数日を遊び暮しぬ」という前書がある。二十七首もある中から、はじめの方の二、三首を抄出する。

ひと年にひとたび逢はむ斯く言ひて別れ
きさなり今ぞ逢ひぬる

酒飲みのわれ等がいのち露霜の消やすき
ものを逢はでおかれぬ

豆腐かもあらむ見て来よとわが言へば友
出でゆきて鴨を持てきぬ

この親しみ深い、なつかしい調子が、いかにも牧水流ではないか。文語を崩したりはしないのに、どこか発想に口語口調が濃厚である。

一首目の第四句の「別れきさなり」などという句割れ、そして「きさなり」という挿入は、何か人懐かしい、ざつくばらんなもの言いを感ぜさせる。二首目、「露霜の消やすき」などという万葉流を入れておきながら、「逢はでおかれぬ」などと。これはもう、単に口語というより、日常会話の話し言葉を結句に据えたこと。三首目の「豆腐かもあらむ見て来よ」は、遂に、会話を文語にしたのである。

これらが親密な空気を、ここに生み出すことになつた。これに較べると、最近の口語使用短歌というものが、いかに、難解かが感じられよう。わたしなどには、それは何だか呑みこみにくいソフィストケートされた細工物のように思える。むろん、これは、歌の内容と切り離すことが出来ないものである。牧水の歌には、英雄は出て来ない。しゃれた服装の都会人も登場しない。心境などといつて構えた人物も、厄介な理屈を

ふり回す知識人も姿をあらわさない。ここに集つたのは、ただの「酒飲み」ばかりである。

「やよ少年たちよ」という題で、若い者を戒めた一連もあるが、その一首で、牧水は

生意気はみにくきものぞ生意気の人若し
あらば見ておもへ子等

なども歌つた。

これなども善悪を区別した道德歌というより、自然の流露であろう。

戦後は、民主主義の時代になつて、むしろ生意気が奨励されるようになってきた。自分を宣伝するのが善であるように思われてきた。何の取柄のない老人まで、自分が一かどのものであるという顔つきをするようになった。窮屈な話である。

牧水が興味をもつて歌つたのは、そういう心の中だけの話、つまり虚構ではなかつた。彼が、歌つたのは、どこまでも、客観的な實在、つまり「へもの」なのであつた。友が鴨を持つてきたという歌に続いて、

したりがほに友さしいだす鴨の鳥わが受
くる手に冷たかりけり

この寒き冬のゆふべに煮なむものこの青
首の鴨にしかめや

と、牧水は歌う。

たしかに、死んだ鴨の羽毛につつまれた、ぼつたりとつめたい重みを、ここに感じないではない。そこに置かれた青首の鴨が見えて来ないのではない。しかし、どうも物足りない。あまりにも反省の弾力を欠いて、(詩)にまで高まり切れなかった不満を言わなければなるまい。

〔實在〕に対する親密さが、反省の契機をつかみそこなわせるのである。抄出した三首には、それでも、古い友人たちを思う詠歎の高まりがあつて、どうやら、歌を支えたのだが、もうここでは力がなくなつてしまつた。そこに牧水短歌の長所と表裏をなす欠陥も見られるのである。心痛むことであるが、批判も必要になつてくる。

三

詩人が、その曇りない眼で、見える世界を見るところは、すこぶる善いことである。詩の出発点は、そこにあつてほしい。実在しない、心の中だけの世界を歌つてもらつても、わたしの心は、少しも動かない。

るろりばたに大き鉢ありて茄栗のゆであがりたる満したるかも

うづだかき落葉のうへに置きてみればわが弁当のさいの美し

小さなものの美を発見した喜びを歌つたのである。その心もちが、透明に伝わってくる歌である。これなどもいかにも牧水らしい。構えたところの少しもない歌と言えよう。

一首目は、北海道で作つた歌だ。それは、どうでも良いことだが、「大き鉢」あたりに北海道らしい線の太さは見えるだろう。その鉢に、今茄栗が、鉢を満したのを、牧水の眼は見る。その栗を美しく思ったのである。

何でもなさそうだが、この発見は特殊である。茄栗というものが、すぐに食べるという実際に結びつくので、その美的観照に至らず終るのであろう。静物画などに、茄栗の図を、わたしは見ることがない。

惜むらくは、「たり」が一首中に二つもあり、その上に「ありて」も用いる重複は、いささか気に障る。これは、少し考えれば、解決したろうと思うが、無造作というのではなしに、それに手を加えないのを好むところが牧水にはあつた。自然体を酷愛するのである。「アララギ」の人人とは、大いに違うのだが、その点は考えてみる必要がある。

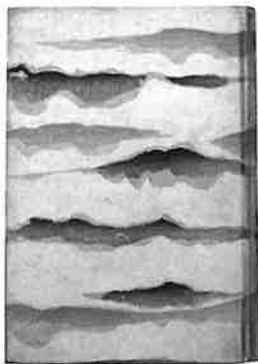
二首目は、場所を特定することができない。どうも、それほど遠くないところに、一日の散歩を試みたのであろう。一連を「森の日なた」と題する。腰を下ろして、持参の酒を一

ばいやろうというのである。

出て来たのは、自室であろうか、それとも宿屋であろうか。作つてもらつた弁当を、積つた落葉の上にひらいて、しばらくながめる。そこに一人歩きの(遊び心)があらわれるのである。これも珍しい歌だと言えるのではなからうか。

「さい」は、漬物と紅生薑と、もしかすると玉子焼ぐらいであろう。落葉の上に置くから、その対照で、それが、いかにも、こまごまと美しく見える。牧水は、それに興じたのであろう。これらは、人生上の心境などというものでない、純粹に(もの)に対する興味から生まれた歌と言えよう。島木赤彦は、年齢とともに境地の方へ傾いて、澄んだ、高い境涯に惹かれるようになってゆく。

これは危険である。心境というものを観念的に設定して、そちらへ向う時、(もの)の世界を遊離しないわけにゆかない。芥川龍之



島木赤彦『太虚集』
(諏訪湖博物館・赤彦記念館提供)

介は、『太虚集』を批評しながら、その危険を指摘してみせたことがあった。

そこに一つの基準があった。つまり、芸術家は、(もの)を離れては無力である。という原理があった。芸術家は(もの)の前に謙虚であれという默契が存在したのである。それは必ずしも、(写真)でなければならぬというのとは、別のことである。

その粟が面白いのだ。その鉢が善いのだ。積もった落葉とその弁当の「さい」が美しいではないかという作者の心に、わたしは引きつけられる。作者が自分を忘れる。その時、観賞者も自分から離脱することができるだろう。

それが、そうでなくなったのは、いつ頃からであろう。つまり、(もの)が、単なる記号シグニになって、その記号を用いた別の(お話し)が登場したのは、いつからであろう。今日の短歌は、ほとんど、そういう作品ばかりである。その(お話し)には、わたしは興味をもつことが出来ないものである。

自分の生活についてのおしゃべり。政治についてのおしゃべり、あれやこれや、いくらでもある。しかし面白くない。セザンヌの林檎は面白い。それが空間をどんな風に占めるか、どんな形態で存在するか、そこには汲み尽しがたい味わいがあるではないか。

四

わたしは、『素描・二十世紀短歌』には、こういう問題には触れることが出来なかった。その理由は明らかである。牧水の晩年と重なる、大正末期から昭和初期にかけての時期を、わたしは射程の中には入れなかったのである。

その前提となったのは、二十世紀短歌と呼ぶものが、日清戦争ごろに第一歩を踏み出し、そして、大正期の末に、終末に達した一種のプロジェクトを言うという仮定である。プロジェクトと呼ぶと、意識的企画者がなければならぬが、ここでは、そのように始まって、ある経過をとって終った一運動をさすのである。

子規は、この運動が、そんなに永続きしようとは考えなかった。「短歌、俳句は明治に尽くべし」というのは、その意味であつたらう。しかし、子規の予想はずれた。明治末



『素描・二十世紀短歌』



正岡子規(子規記念博物館提供)

期から大正初年にかけて、若い世代の者が二度萌えの勢いを示した。

鷗外の観潮歌会が、ここで、ある力を発揮したことは、認識しておいてよからう。啄木、白秋、茂吉は、それぞれの方向の中で、鷗外から、多くを吸収したことは疑いない。このことは、簡略に述べたことがあるから、再説しない。

この(二度萌え)が、必ずしも、短歌にとつて勝利を意味するものではなかった。それは鷗外という(純抵抗)で、そこに、「積極の成功がないでもない」という性質のものであった。

それでも、ここには、まだ共通の地盤があった。それは、(もの)の世界に対する探究から生まれる作品でなければならぬ。記号を用いてこしらえ上げたお話しとは違うという素朴な確信である。

それがもう、終りに近づいて来たという予



斎藤茂吉 (斎藤茂吉記念館提供)



北原白秋(北原白秋生家・記念館提供)

感は、誰の胸にも、薄薄と感じられて来た。白秋と茂吉も、歌は作り続けたが、歌集の刊行がしばらく絶えた。二十世紀のプロジェクトは、もう、命脈がつきてきた。そうはつきりと意識したわけではない。歴史の渦中にあるものは、その歴史を自分の眼に客観的に見ることが出来ないのである。

ただ、釈道空一人が「短歌の円寂する時」という文章で、短歌の終末を告知した。短歌の命数が尽きたのだと、彼は言う。しかし、それは、



釈道空 (折口博士記念古代研究所提供)

二十世紀のプロジェクト」、つまり普通「近代短歌」と呼ぶものが終わったのであった。

しかし、道空は、その後も短歌を作り続けた。それは何なのか。近代短歌なのか。それとも「現代短歌」とでも言うべきものなのか。わたしは、それを言うことが出来ない。

いつたい、「近代」とか「現代」とかいう名は紛らわしくて困る。そこから、無益な論争が起る。もし「現代短歌」というものがあるとするなら、その存在の条件を幾つか、はっきり挙げるべきであろう。自分の属する時代だから過去のものより、一段とすぐれたものだと言うような独善論は話しにならないだろう。

『素描・二十世紀短歌』は、したがって、第一次世界大戦の頃までで、打ち切るべき性質のものであった。牧水の晩年の歌を考えることは不可能であった。

今回、『黒松』を読み直して、何首かを抄出して考えてみる事が出来て、借金を返したようにほっとした気もちである。もつと多くの歌に、わたしは丸を打っておいたが、それを全部ここに挙げることは出来ない。

この歌集は、短歌新聞社文庫にあるかどうか知らないが、一人一人読み直して欲しいものである。

(「左岸だより」第五十九回から転載)

プロフィール(たまきとおる)



歌人。一九二四年仙台市生れ。歌集に「馬の首」「樛木」「汝窠」「われら地上に」(道空賞受賞)「徒行」「蒼耳」「香貫」。評論

論に「近代短歌の様式」「近代短歌とその源流」「芭蕉の狂」「西行」「山歌集」の世界」「子規」活動する精神」「素描・二十世紀短歌」等がある。『会報』第十号に「沼津と近代短歌」、同第十一号に「旅人さんの思い出」、同第十五号に「牧水の位置」、『館報』第二十一号に「牧水短歌の人間像」を掲載させていただいている。静岡市在住。

第十回日本ほろよい学会 延岡大会に参加して

平成二十年十月二十四日宮崎県延岡市で開催された「第十回日本ほろよい学会延岡大会」

に参加しました。宮崎県延岡市までの長い行程は、当初から新幹線を使って行くことになっていました。そのため当日は朝七時までに沼津駅へ行かなければなりません。朝は苦手で前日まで憂鬱な気分でしたが、いざその日になってみるとなぜか気が急いで、どこことなくハイ状態になっている自分に気付きます。

その内、林茂樹理事長が一升瓶を二本ぶら下げて駅に現れると、一層ハイになっていく自分に苦笑してしまいました。これから九時間わたって車内宴会が開かれることに興奮しているのでしょうか。酒飲みの浅はかさといったところでしょうか。

旅に出るときは決まって、日常からの脱皮と未知への体験を期待し、酒が無くても心躍るものなのですが。心なしか他の参加者の皆さんもいつもより声が大きく感じられます。

その参加者ですが、沼津関係からは総勢十三人、うち十人がこの長旅を共にしました。

いずれ劣らぬ酒飲みつわものの兵のような面々です。

電車は、三島駅でこだま号に、静岡駅でひかり号に、名古屋駅でのぞみ号に、小倉駅で特急ソニックに、大分駅で特急にちりんに乗換えることになっています。ひかり号に乗り移った名古屋まではアルコールは我慢と言いつて聞かせ、のぞみ号に乗り換えてからは、待っていました！とばかりに車内宴会に突入。

市勢のこと、教育のこと、沼津の人や歴史・文化等々、勿論、牧水及び全国にある牧水会のこと、ほろよい学会のことなども話題に上り、こんな有意義な時間はめったにないと思うほど、いろいろためになる話を聞くことができました。とても充実した楽しい時間が過ごせたと思っています。

という訳で、九時間という電車の旅は長いという印象はありませんでした。参加者の中に飛行機嫌いという前近代的な人がある関係で電車の旅になったようですが、これはこれで楽しい旅になり、未長く記憶に止まるでしょう。



延岡大会の会場に到着した参加者一行

延岡に到着したのはその日の午後四時過ぎでしたが、この頃になると電車の中で一眠りしたことが効を奏して、車内宴会など無かったかのように出迎えの人たちに爽やかな笑顔を振りまいていました。

いよいよ、「第十回日本ほろよい学会」の開催です。会場は延岡市紺屋町のホテルメリージュ延岡です。沼津で開催した時も三百六十名余の人が参加し、延岡大会でも三五〇名程参加しているとのこと。日本



佐佐木幸綱会長の基調講演が行われた

中どこへ行っても酒を飲む機会というのは盛況になるものですね。いや、それよりも牧水のファンが多いということでしょう。延岡は牧水とはとびきり縁の深いまちですから。さて、本番ですが、延岡大会の主催者側のあいさつが一通り済んでから、日本ほろよい学会会長である佐佐木幸綱早稲田大学教授の講演に移りました。佐佐木会長の講演では、「牧水の酒の話題二つ」と題して、牧水が酒をこよなく愛でたことを酒に関わる歌の紹介を通してエピソード風にお話され、大変興味

深く且つ楽しい講演でありました。佐佐木幸綱会長の興味深い講演の後は鮎の塩焼きをつまみにした日本酒のオンパレードです。九州へ行くと、殆どが焼酎で美味しい日本酒など無いと思っていましたが、どっこい味わいのある日本酒がしこたま出てきて日本酒党には嬉しい悲鳴です。沼津や裾野で開催した牧水全国大会で交流した人たちと再会



塩月眞実行委員長が開催地を代表して挨拶を行った



首藤正治延岡市長から歓迎の挨拶があった

し、大会はあっという間にクライマックスに達しました。それに華を添えたのは伝統的な郷土芸能「延岡神楽」です。保存会の皆さんの日頃の練習ぶりが分かる熱のこもった演技に日本文化のルーツを見る思いがしました。

そうこうしているうちにお開きの時間が来てしまいました。酒飲みの常として二次会への出発です。大勢の参加者が二次会へ繰り出し、夜遅くまで交流の華を咲かせました。

翌日からは、前日に会場で合流した榎本童子沼津市若山牧水記念館長母子が加わり、マイクロバスで鹿児島までの観光旅行をしました。

出発に際しては、前日の酒宴が嘘のように、全員がとても清涼しい笑顔で、延岡大会実行委員会の皆さんの見送りに応えていました。しかし、マイクロバスの車内では約一名を除き、さすがにお酒く！の呼び声はありませんでしたが…。

鹿児島までの道程は、なかなか見応えのある観光旅行になりました。

最初に立ち寄ったのは美々津港で、我が国海軍の発祥の地とか。そして、その周辺の江戸時代の名残のある街並みは、中庭や土間、屋根裏そして炊事場など当時の屋敷の構造がそのまま残っているのですから、一見の価値があります。

ここで、古くからある駄菓子を味わい、お茶をごちそうになって、再びマイクロバスの旅が続きます。



美々津港の「日本海軍発祥の地」記念碑の前で

次に立ち寄ったのは、夥しい数の古墳がある西都原公園。墳墓の数は二百基以上あるとか。公園の中は緑豊かな木々、そして見渡す限り一面に咲くコスモスの花。「幸福」というフランス映画に出てくるような美しい光景の中で、多くのグループやカップルがリクレーションや語らい、そして交流など、思い思いに寛ぎの時間を過ごしていました。このような広大で清々しい憩いの空間を持つ地元

人々をうらやましく思いました。沼津もこうした憩いと安らぎと交流の場が充実していれば、住む人々の喜びにもつながるばかりでなく、まちの発展にも寄与すると思つたのは、私ばかりではないと思います。

マイクロバスは古墳群を後にして、一際目立つ形状の霧島山や韓国岳を車窓から眺めながら一路鹿児島へ。

到着したのは尚古集成館です。幕末の西欧列強の動きにいち早く対応して、製鉄や造船など数々の近代産業を起こし、一大工業拠点を作り上げた島津斉彬等の業績を展示した博物館です。当時の優れた近代技術の粋を集めた展示品は言うに及ばず、脈絡を追って説明する展示手法や内容、博物館に付随する売店や休憩施設、イベント広場、桜島がすぐ間に迫る借景など、博物館としての機能がとても充実していました。私は二度目の訪問でしたが、見るもの全てが新鮮に映り、集合時間ぎりぎりまで時間を惜しんで見学しました。

尚古集成館の次は、西郷隆盛が命を絶った城山です。くねくねした狭い道をマイクロバスが絶妙の運転さばきで登っていくと途中に西郷さんが最期を過ごした洞窟が見えます。それを横目に見ながら頂上へ。

行ってみると見事な桜島が眼前に現れます。



尚古集成館のある磯庭園にて

その迫力は相当なもので、大勢の観光客が感嘆の声を上げ、シャッターを切っていました。私たちも勿論とつかえひつかえ記念写真を撮りました。

こうして、延岡市から鹿児島市までのマイクロボスの旅を終え、後はホテルに入り、引



城山公園から錦江湾と桜島を望む

き続き定番の晩餐会となるわけです。この日鹿児島県でねりんピックが行われており、どこのホテルもお年寄りで満員だそうです。私たちの泊まったホテルも勿論満員でした。晩餐会は郷土色豊かな薩摩料理の店で、今度日本酒でなく焼酎で乾杯となりました。鹿児島の焼酎は実に美味い。昨日とは違った気分です。昨日とは違った気分です。昨日とは違った気分です。

三日目は、長旅に耐えられない一部の人を除き、再び九時間の電車の旅で帰郷しました。私自身は滋賀県に野暮用があり一足早く鹿児島を後にしましたが、電車の中で昨日までの二日間の様々な出来事を思い出し、一人思い出し笑いをしながら、退屈することなく旅を終えることができました。

日本はよろい学会に参加して、一言…。

この日本はよろい学会を考えた人、そしてそのネーミングをした人、実に良いセンスの持ち主だと思います。お酒は良いお酒と悪いお酒がありますが、良いお酒を象徴的に表した言葉が「ほろ酔い」であると思います。そして、生まれてこの方、縁のないアカデミックな気分にはんの少し浸らしてくれる「学会」という言葉がくっついて、酒飲みにとつて、とても魅力的なイベントに仕上がっています。延岡大会は沼津大会に劣らず、上品で格調高く、一層華のある楽しいさっぱいの充実したイベントだったと思います。

最後に、このイベントの旅行計画、参加者への連絡等々準備に大変なご苦労をおかけした沼津牧水会事務局の皆様から御礼を申し上げます。そして、延岡大会の実行委員会の皆様、本当にありがとうございました。

(本会会員 小池一廣)

第55回沼津牧水祭 短歌大会

十月五日(日)
午前十時三十分
沼津市立図書館
視聴覚ホール

沼津牧水祭短歌大会は、「かりん」主宰の歌人で評論家の馬場あき子先生を講師にお迎えして開催された。出詠歌一九三首、当日の出席者一四二名と大盛況の歌会となった。

午前の「今日の短歌」と題した講演では、過去一年間に出版された九十代の岡部桂一郎から中堅の大滝和子や若手の永田紅までの歌集の中から十五首を引用して話をされた。年齢も境遇も歌歴も異なる歌人の、バラエティーに富んだ味わい深い歌の数々をユーモアたっぷりに解説され、思わず引き込まれた。

湯殿より子ら転び出づビニールのカニと
クジラと祖父を残して 渋谷和子
風呂場より走り出て来し二童子の二つち
んぼこ端午の節句 佐佐木幸綱

一首目のカニとクジラと祖父が同列なのが面白い。これが詩である。この二首は同じような場面だが、湯殿と風呂場では今感が違う。風呂場の方が実感を呼び起こさせて有利であると、説かれた。リアルとリアリティー、発想の転換、空間の捉え方、大地と季節との対話、感情過多には注意、字余りでも助詞は落

今日の短歌



第55回沼津牧水祭短歌大会

ち着くのに必要等々、いかに端的に味わい深く表現するか言及された。最後に、それぞれの世代の人が「今日の短歌を作るぞ」と自覚して詠めば、それが今日の歌になる、と結ばれた先生の言葉に、なぜかほっとした。

午後は一四二首の歌会となる。時間が限られた中での批評は、大変な作業である。評の中から要点を記す。

短歌だからといって、慣れない文語を使う必要はない。地方独特の純朴な表現は温もりを感じる。上句と下句、其の間にある意外性が現代短歌の特徴である、と。次に、結句にふれ、言い過ぎない、説明をしない、読み手

にまかせるなど、結句の大切さを諄々と話された。私自身いつも悩む所なので、胸に染み入った。

髪をきりつとまとめ、優雅に和服をお召しになり、張りのあるお声で話される講義に、時の経つのを忘れる一日だった。

講師選の「牧水賞」と互選賞の上位三首

牧水賞一席 沼津市 秋元悦子

明けやらぬ厨に火の神まつられて母はわれらの辨当作りき

牧水賞二席 裾野市 高梨照美

おりおりの野菜つくり日に日焼して「後期」の夫はまだまだいける

牧水賞三席 沼津市 則次千代子

古き筆筒より出したるハンカチにしみている母が飼いいし蚕の匂い

市長賞 沼津市 内田恵美子

山水画の母の細の帯 涼やかに実家の暖簾になりて揺れおり

市議会議長賞 御殿場市 勝間田頼子

戦争を知らぬ子供が被爆せし祖父の語りを正座して聴く

教育長賞 島田市 西川幸子

旧かなにお元気でせうかと文の来て残る暑さのやはらぐ思ひ

(本会会員 鈴木利子)

第55回沼津牧水祭

碑前祭・芝酒盛

十月十九日(日)午前十一時



温暖化の影響からか、いつまでも暖かい日が続く中、久しぶりに秋らしい爽やかな天候になった十月の第三日曜日、和やかな雰囲気の中に沼津牧水祭・碑前祭が開催された。

琴名流大正琴沼津支部石井会による大正琴の演奏に続いて、林理事長の挨拶、斎藤衛市長、工藤達朗教育長の祝辞、榎本篁子館長の歌碑への献酒、献花、挨拶が行われた。昨年急遽ご出演いただいた青木歌堂氏が本年も出演された。標準よりも長い二尺四寸の管を使った普化宗本曲「打破」、標準の一尺八寸管(尺八)を使った福田蘭堂作曲の「桔梗幻想曲」の演奏に続き、「笛吹童子のテーマ曲」が流れ、会場は懐かしく楽しい雰囲気包まれた。続いて、花柳寿宗師による牧水短歌と長詩「枯野の旅」の日本舞踊が披露された。故花柳稔師の後を継いで四回目の出演となり、益々円熟味が増した素晴らしい踊りに惹き付けられた。

第十九回「中学生短歌コンクール」の特選歌の表彰が行われた。今回は、市内十八校から過去最高の二千首を超える応募があり、その中から選ばれた十首の特選歌は、何気ない日常の生活の中から歌ったものが目を引き、会場からは大きな拍手が起った。

式典の最後は、「牧水のうた」を歌う会の合唱で、沼津市芸術祭へも参加するなど、レベルの高い歌唱を聞かせていただいた。

斎藤市長、杉山功一市議会議員、遠来の石川錬治郎秋田県議会議員、日向市東郷町の若山牧水記念文学館那須文美事務局長、東京牧水会の

田原大三事務局長と榎本館長の六人による清酒「牧水」の鏡割りに続き、杉山議長の音頭による乾杯で、「芝酒盛」が始まった。

石川錬治郎氏の祝辞のあと、歌碑の前で岳心流沼津愛吟国風会が牧水短歌を吟じ、続いて芸人寄合衆「ようそろ」の太鼓。主宰のはせみきた氏が都合で参加ができないと聞き、残念な思いがあったが、ひよつとこのお面をかぶった人が見事なバチさばきで太鼓を打っている。誰だろうと思っていたら、出演できないと聞いていたはせ氏が演奏していたのだ。昨年は参加できなかった裾野の五竜太鼓が、今回はアルトサククスを入れての演奏。尺八の青木氏とのセッションも行われ、管楽器と打楽器との素敵な演奏に会場は大いに盛り上がった。

恒例になった裏千家宗菊会による呈茶で、にぎやかな中にもホッと落ち着くひと時を味わうことができ、今年も和やかに碑前祭が終了した。

なお、牧水没後八十周年にあたる第五十五回沼津牧水祭・碑前祭の開会に当たり、牧水の孫である榎本篁子当館館長は、格別な想いを込めて挨拶を述べられた。榎本館長の挨拶の全文と、館長が挨拶の中で披露された喜志子夫人が牧水の柩の中に納めた別れの手紙「納棺のをりに」を次に紹介する。

碑前祭に寄せて

榎本 篁子



皆様こんにちは。今年も昨年と同じにうっすらと刷毛ではいたような富士が見事でございます。毎年十月の第三日曜日に催される碑前祭も今年で五十五回になりますが、その年毎の富士の姿を見られることも沼津に伺う楽しみのひとつでございます。

本日もお忙しいなか、斎藤衛市長、杉山功一市議会議長、工藤達朗教育長のご臨席を賜り、ありがとうございます。秋の行事多端の折から、ありがとうございます。

斎藤市長さまには今期にて御勇退とうかがいましたが、御就任以来の毎年の碑前祭、沼津文学祭等々、牧水へのお心入れに對しまして心よりの御礼を申し上げます。

今年は、かなの第一人者で日本芸術院賞受賞者、日展参事の榎倉香邨先生が遠方からご参列くださり、また、石川鍊治郎秋田県議会議員、九州の若山牧水記念文学館那須事務局長、東京牧水会の田原事務局長ほか多くの方々のご参加も、うれしくありがたいことでございます。

昨年は、「日本ほろよい学会沼津大会」「沼津市若山牧水記念館開館二十周年」と、牧水没後八十年の関連行事がございました。今年は没後八十周年ということで、故郷宮崎をはじめ、全国で記念行事が行われております。各地に伺う度に牧水と出会う驚きがございます。

この十月初めにも北海道旭川で一年前に建立された牧水歌碑の記念祭がございました。旭川は沼津ゆかりの文人井上靖の生誕の地であり、記念館もございます。また、昭和四十年朝日新聞懸賞小説に当選した三浦綾子の故郷でもあります。

郷でもあります。

牧水は大正十五年、二ヶ月余りをかけて北海道を歩きました。その折、女流歌人斎藤史氏の父上の、軍人で歌人でもあった斎藤劉氏宅を訪ねたわけです。牧水が歌を詠んだ春光台に歌碑は建てられており、歌を詠んだのと同日十月五日に記念祭が行われました。

野ふとうのもみぢの色の深けれやからま
つはまだ染むとせなくに
牧水

牧水が、当時十六歳であった劉氏のお嬢さんの史さんに「君が歌をやらないのはいかなあ」と勧めたことが歌に目覚めたきっかけだったということはよく知られていますが、この九月初め、NHKテレビの「あの人に会いたい」という番組の中で、もう晩年であられた史さんが、そのエピソードを牧水の口調そのままに披露され、その時の写真まで紹介されました。

枯野原霜どけみちを行く時し君が手のふ
り美しきかな
牧水

史さんにとって七十年以上昔の事になる話をされたことに、また、私どもが歌碑記念祭出席のため北海道行きの直前の放送であっただけに、その偶然に驚きました。

また、先の三浦綾子氏ですが、水点のモデルとなったドイツトウヒ林などの外国樹種見本林（林野庁上川中部森林管理署）内に記念館がございます。その中に「わが青春に出会った本」というコーナーがあり、チェーホフや小林秀雄、茂吉の『赤光』とともに牧水の紀行選集『幾山河』が展示されておりました。牧水に限りませんが、一人の人の存在というものは、いろいろな形でそれぞれの人の中に入つて形をかえて生かされてゆくものだということを改めて思いました。

この度おいで下さった榎倉香郵先生は、亡くなられた奥様との思い出の中で牧水の心につれ、牧水にのめりこんだとおっしゃいましたが、この二月の日本橋三越本店での個展「牧水を書く」に始まって、七月には宮崎県日向市の牧水記念文学館にても書展を開かれました。そしてこの度は、沼津の牧水記念館に「千本松の富士」として見事な六曲屏風を頂戴いたしました。角川「短歌」十月号には「牧水の純粹」として素晴らしい一文を寄せておられます。

牧水の歌は美しい言葉につくり直すことなく、そのままを包み隠すことなく、感動を自分の言葉で素直に詠い上げる点が凄い。六年先輩にあたる昴子の風にも

靡くことなく、あくまでも自分に生き抜く、この心情こそ私達は学ぶべきでないだろうか。目立つために右往左往する人の多い世の中、結局自分の道を突き進むその真実こそ人間としての尊い行為であると思う。やはり心底自分の感動を鋭利にキャッチし、変にあやつることもなく、そのままそれこそストレートに生れたものが心を打つのである。牧水は終生中途半端な、いいかげんな歌を詠まなかつた。常に純粹に真実を追究したといわれている。

このように深く牧水を理解して下さつて書かれた「千本松の富士」、記念館に飾らせていただきましたので、皆様是非ご覧いただきたいと思ひます。

牧水は、八十年前の昭和三年九月十七日、林理事長のおじい様で、この千本松原の松を伐採から守られた榎樹上人に引導を渡されて亡くなったわけですが、その折、妻喜志子は夫牧水に別れの手紙を書いて柩に納めました。牧水をよく表しておりますので、その冒頭の部分だけお読みして終わりたいと思います。

あなたは御生前よく私に、「無為にして化す」といふ事を仰っていました。また

「自然のすがたに同化してゆけさうな氣持」とも仰っていました。

あなたの御一生は御苦労の多いものでもありました。人間として感ずべきものをよく感じ、見るべきものをよく御覧になりました。そして長からぬ御一生に、人間の身として受けるすべての物を快くお受けになり、感謝と喜びにみちた御生涯をお過しになられました。

また、妻としての私、御愛撫限りなかつた四人の子供達、また多くの御知己、友人をもすべて平等な者に御覧になつて、何かしらつゝ、ましい感謝のお心のままに、自然な安らかな御臨終をお遂げになりました。有難うございます。

そして、笠、杖、脚絆、草鞋それぞれゆかりのあるものを旅支度として揃え、最後にお酒と「青柳に蝙蝠あそぶ絵模様」の藍深きかもこのさかづきに「の盃を入れたのでした。その盃が焼けずにそのままの形で残つて、藍を更に深めて今記念館に展示してございます。

没後八十年の年に記念館のその盃を見ますと、改めてこの長い長い間の沼津牧水会の皆様の牧水に寄せて下さるお心のありがたさを心から思います。長くなりましたが、今年もありがとうございました。

第21回 雛の歌会

三月一日(日)
午後一時三十分
沼津市若山牧水
記念館ラウンジ



香川ヒサ先生

数日來続いた雨は漸く上がったものの空気の冷やかな一日となった三月一日午後、第十二回若山牧水賞を受賞された香川ヒサ先生を講師にお迎えして雛の歌会は開催された。香川先生は、祖父母が静岡県のご出身で、何となく静岡県には親近感を抱いておられるとのことだった。

投稿数百三首、参加者六十一名であった。講師の香川先生は、一首、一首を丁寧に読み込んで、還暦を迎えたとは思われない若々しきで、ほとんどの作品をやさしく褒めておられ、今風の批評の仕方など勉強させられる

ことが多々あり、とても和やかで有意義な時間を過ごすことができた。

香川ヒサ選十首

諫めればこわれむ少女の危うさは床に落せる卵の重さ 高梨照美

少女の危うさは床に落とした卵の中の重さ、内部のもう一つの奥を考えた、そのことがユニークにしている。

くぼ石のいぼ取る水に秋が澄み弘法さまの足跡をゆく 井川その子

「水に秋が澄み」で、一首が生き生きとしてきれい。小さなくぼ石の中から弘法様の歩いた大きな宇宙、そんなところまで見えて来る。

ほかの娘にママの遺伝子とどけるが、お前の役目 男になれよ 村松建彦

今の父親は遺伝子を運ぶだけが男の役目だと思っているのか。非常にショックを覚えた。

ふるさとへ向ふ列車を待つホームわれと似し他人幾たりかふる 廣島弥栄

自分に似た感じの人が何人かいる。同郷者だとピンと来る。故里への強い思いが表れている。

夫と吾の机の間の広辞苑・漢和辞典のほどこよき手擦れ 小馬晴美

仲のよい夫婦の光景と思う。でも、微妙な間柄であって、辞書を隔てている呼吸の感じが

出ている。

目白待ち蜜柑を双に分かつ朝久しく便りなき友想う 宇治友子

メジロとミカンを双に分けて心の交流をしている時、友を想った気持ちがりアルに伝わって来る。「分かつ」が効いている。

かんむりをなくして雛にあやまりつよわい九十雛飾りする 田中千代

知らない間に冠がなくなっている雛に謝りながら飾っている作者の瑞々しい気持ちが表れている。

一月の銀杏も良きかな霧雨にけふる並木の春待つ気配 江藤真佐子

一月の銀杏の発見、春を待つ目が出ている。三句以下の具体的な理由が面白い。作者の一つの見方がよい。

ひばり鳴く富士川河原にさくらえび炎くづのごとく干されゆきけり 飯泉千春

仕事ができばき行われていることを表現したかったか、この土地ならではの風景。「炎くづのごとく」が生きている。臨場感がある。

赤き屋根の貨車のろのろと動き始む長き物語の始まる如く 原悦子

列車と一緒に作者がゆつくりと行く先々の出来事を楽しんでいく。想像力を働かせている。

(本会会員 伊勢幸子)

文 化 講 座

初心者のための短歌講座(午前) 牧水記念館短歌会(午後)

日 時 平成20年4月～平成21年3月 毎月第2土曜日(全11回)

講 師 須永秀生氏



牧水記念館俳句会

日 時 平成20年4月～平成21年3月
隔月第4日曜日午後(全5回)

講 師 榎本好宏氏



書道講座

日 時 平成20年4月～平成21年3月
毎月第3火曜日午後(全10回)

講 師 成田真洞氏



サロン音楽の夕べ

沼津市若山牧水記念館ラウンジ

第1回 古楽コンサートシリーズ21
『バッハ 音楽探訪 ～ リュート、チェンバロ、
クラヴィコードとおはなし ～』
日 時：平成20年6月28日(土) 午後6時45分
出 演：佐藤亜紀子 (ヴァロックリュート)
杉山佳代 (チェンバロ、クラヴィコード)
来 場 者：100人



第2回 日本のうた 若山牧水詠唱
日 時：平成20年9月20日(土) 午後6時30分
出 演：武井智子 (メゾソプラノ)
伊坪淑子 (ピアノ)
来 場 者：100人

第3回 古楽コンサートシリーズ22
『リコーダー音楽の愉しみ』
日 時：平成20年12月6日(土) 午後6時45分
出 演：武石富士雄 (リコーダー)
青木里砂 (リコーダー)
杉山佳代 (チェンバロ)
来 場 者：100人



第4回 フランスの電波楽器
オンド・マルトノを聴く夕べ
日 時：平成21年2月11日(水) 午後6時30分
出 演：久保智美 (オンド・マルトノ)
一ノ瀬トニカ (ピアノ)
鈴木千香子 (ヴォーカル)
来 場 者：50人

第5回 古楽コンサートシリーズ23
『ヴェネツィアからパドヴァへの渡し舟』
日 時：平成21年3月14日(土) 午後6時45分
出 演：コンチェルト・ゼフィロ (ヴォーカルアンサンブル)
杉山佳代 (チェンバロ、オルガン)
来 場 者：85人



平成20年度事業報告書

総会 (第22回総会) 平成20年5月14日(休) 午後6時～7時
理事会 第1回 (通算114回) 平成20年4月26日(土) 午後6時～7時
第2回 (通算115回) 平成20年5月14日(休) 午後7時～7時10分
第3回 (通算116回) 平成20年8月12日(休) 午後6時～6時50分
第4回 (通算117回) 平成20年12月3日(休) 午後6時～6時30分
第5回 (通算118回) 平成21年3月6日(金) 午後6時～7時

会報 第21号 平成20年5月15日発行
館報 第41号 平成20年9月10日発行
第42号 平成21年3月15日発行

1 調査研究事業

- (1) 第9回「百草園牧水歌碑祭」
日 時：平成20年8月24日(日) 正午
会 場：東京都日野市百草園 牧水歌碑前
参 加 者：小出和夫、勝又十枝、原悦子、三宅芳則
- (2) 第58回 牧水祭
日 時：平成20年9月17日(休) 午前10時
会 場：日向市東郷町坪谷 若山牧水生家裏牧水歌碑前
及び牧水公園ふるさとの家
祝電打電
- (3) 第10回「日本ほろよい学会」延岡大会
日 時：平成20年10月24日(金)～26日(日)
場 所：宮崎県延岡市
参 加 者：林茂樹、根本寛子、大澤敏夫、勝又十枝
金子安夫、北村正昭、小池一廣、小出和夫
瀧澤伸一、千野慎一郎、新美麻里、原悦子
三宅芳則

2 第55回沼津牧水祭の運営

- (1) 短歌大会
日 時：平成20年10月5日(日) 午前10時30分～午後4時20分
会 場：沼津市立図書館 視聴覚ホール
講 師：馬場あき子氏 (若山牧水賞選考委員、「かりん」主宰)
応募短歌：193首
参 加 者：142人
- (2) 碑前祭・芝酒盛
日 時：平成20年10月19日(日)午前11時～午後2時30分
会 場：千本浜公園 牧水歌碑前
参 加 者：約341人

3 文学講演会及び文学講座等の開催

- (1) 第21回「雛の歌会」
日 時：平成21年3月1日(日) 午後1時30分～4時
会 場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
講 師：香川ヒサ氏 (第12回若山牧水賞受賞者)
応募短歌：103首
参 加 者：61人
- (2) 初心者のための短歌講座
日 時：平成20年4月～平成21年3月
毎月第2土曜日 午前10時～12時
会 場：沼津市若山牧水記念館会議室
講 師：須永秀生氏
参 加 者：11回開催 延べ226人
- (3) 牧水記念館短歌会
日 時：平成20年4月～平成21年3月 毎月第2土曜日
午後1時30分～3時30分
会 場：沼津市若山牧水記念館会議室
講 師：須永秀生氏
参 加 者：11回開催 延べ183人
- (4) 牧水記念館俳句会
日 時：平成20年4月～平成21年3月
隔月第4日曜日 午後1時30分～4時30分
会 場：沼津市若山牧水記念館会議室
講 師：榎本好宏氏
参 加 者：5回開催 延べ123人

(5) 書道講座

日 時：平成20年4月～平成21年3月
毎月第3火曜日 午後1時～3時
会 場：沼津市若山牧水記念館会議室

講 師：成田真洞氏
参 加 者：10回開催 延べ126人

(6) 第19回「中学生短歌コンクール」募集・表彰

募集期間：平成20年5月15日～9月10日
応募短歌：2,073首 (18校, 2,073人)
入選短歌：51首 (51人)
選 者：青木朝子、須永秀生、杉山芳春、曾根耕一
星谷亜紀
表 彰：平成20年10月19日(日) 沼津牧水祭碑前祭にて

4 企画展示

- (1) 「中学生短歌コンクール」入賞作品
成田真洞先生揮毫による短冊展示
期 日：平成20年10月19日(日)～11月2日(日)
会 場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
入 場 者：564人
- (2) 平成20年度書道講座受講者作品展示
期 日：平成21年3月18日(休)～3月29日(日)
会 場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
入 場 者：380人

5 音楽イベント

- 第1回 古楽コンサートシリーズ21『ハッハ 音楽探訪』
日 時：平成20年6月28日(土) 午後6時45分
会 場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
出 演：佐藤亜紀子 (ヴァロクリュート)
杉山佳代 (チェンバロ、クラヴィコード)
来 場 者：100人
- 第2回 日本のうた - 若山牧水詠唱 -
日 時：平成20年9月20日(土) 午後6時30分
会 場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
出 演：武井智子 (メゾソプラノ)、伊坪淑子 (ピアノ)
来 場 者：100人
- 第3回 古楽コンサートシリーズ22『リコーダー音楽の愉しみ』
日 時：平成20年12月6日(土)午後6時45分
会 場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
出 演：武石富士雄、青木里紗 (リコーダー)
杉山佳代 (チェンバロ)
来 場 者：100人
- 第4回 フランスの電波楽器『オンド・マルトノを聴く夕べ』
日 時：平成21年2月11日(休) 午後6時30分
会 場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
出 演：久保智美 (オンド・マルトノ)
一ノ瀬トニカ (作曲、ピアノ)
鈴木千香子 (ヴォーカル)
来 場 者：50人
- 第5回 古楽コンサートシリーズ23
『ヴェネツィアからパドヴァへの渡し舟』
日 時：平成21年3月14日(土) 午後6時45分
会 場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
出 演：コンチェルト・ゼフィロ (ヴォーカルアンサンブル)
杉山佳代 (チェンバロ、オルガン)
来 場 者：85人

社団法人沼津牧水会定款（抜粋）

- 第一条 この法人は、社団法人沼津牧水会という。
- 第二条 この法人は、事務所を静岡県沼津市千本郷林一九〇七番地の一に置く。
- 第三条 この法人は、歌人若山牧水を顕彰し、文学的業績の研究を深め、短歌文学の普及を図り、もって、教育文化の振興に寄与することを目的とする。
- 第四条 この法人は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。
- (1) 歌人若山牧水に関する調査研究
- (2) 沼津牧水祭（短歌大会および碑前祭）の運営
- (3) 文学講演会および文学講座の開催
- (4) 文学に関する各種出版物の刊行
- (5) 沼津市若山牧水記念館の管理運営の受託
- (6) その他前条の目的を達成するために必要な事業
- 第五条 この法人の会員は、次のとおりとする。
- (1) 正会員 この法人の目的に賛同して入会した個人又は法人
- (2) 賛助会員 この法人の事業を援助する個人又は法人
- (3) 名誉会員 この法人に特に功労のあつた者で、総会の議決をもって推薦された者
- 第六条 会員にならうとする者は、入会申込書を理事長に提出し、理事会の承認を受けなければならない。ただし、名誉会員に推薦された者は、入会の手続きを要せず、本人の承諾をもって会員となるものとする。
- 第七条 この法人の入会金は、次のとおりとする。
- (1) 正会員 一〇、〇〇〇円
- (2) 賛助会員 三〇、〇〇〇円以上
- 2 この法人の会費は、次のとおりとする。
- (1) 正会員 年額 五、〇〇〇円
- (2) 賛助会員 年額 一〇、〇〇〇円以上

（理事長）林 茂樹
 （副理事長）杉山 光男
 （理事）浅井 治 須永 英男
 八十濱俊一 保坂 輝夫 田中 和男 金子 安夫 四方 一弥
 杉山 重義 杉山 芳春 長澤 晴夫 青木 朝子 星谷 昭子
 （監事）大澤 敏夫 鈴木 弘行
 （事務局長）大島 葉子 伊藤早智子 羽根田治子 木下 和子 近藤美智代
 （事務局）大島 葉子

編集後記



本年四月一日付けで社団法人沼津牧水会事務局長に就任いたしました。

林理事長から辞令交付を受けた途端、にわかには不安がよぎりましたが、牧水の短歌やその他の文学についてあらためて学ぶ機会に恵まれたことをありがたく思い、多くの皆様からご指導、ご鞭撻をいただきながら、職責を果たすべく努めたいと存じます。どうかよろしくお願い申し上げます。

本号には、玉城徹先生の編集発行になる「左岸だより」から、「歌集『黒松』の短歌」を転載させていただきました。

文中で紹介されている短歌新聞社刊の『黒松』は、記念館の売店に置いてありますが、文庫サイズで大変読み易いものです。

昨秋、延岡市で開催された「日本ほろよい学会」に参加した模様を会員の小池一廣さんに寄稿していただきました。いつまでも記憶に残る楽しい旅でした。

牧水没後八十周年にあたる昨年の沼津牧水祭・碑前祭における榎本篁子当館館長の思い入れの深い挨拶の全文を掲載させていただきました。また、喜志子夫人が牧水を見送った「納棺のをりに」には、この時代の人の相手を思いやる心持の深さに痛く感じ入りました。ぜひお読みください。

（大澤敏夫）